

女体

芥川龍之介

青空文庫

楊某^{ようぼう}と云う支那人が、ある夏の夜、あまり蒸暑いのに眼がさめて、頼杖^{らいじょう}をつきながら腹んばいになつて、とりとめのない妄想^{もうそう}に耽つてしていると、ふと一匹の虱^{しらみ}が寢床^{ふしど}の縁^{ふち}を這つてゐるのに気がついた。部屋の中にもした、うす暗い灯^ひの光で、虱は小さな背中を銀の粉^{こな}のように光らせながら、隣に寝ている細君の肩を目がけて、もずもず這つて行くらしい。細君は、裸のまま、さつきから楊の方へ顔を向けて、安らかな寢息を立ててゐるのである。

楊は、その虱ののろくさい歩みを眺めながら、こんな虫の世界はどんなだろうと思つた。自分が二足か三足で行ける所も、虱には一時間もかからなければ、歩けない。しかもその歩きまわる所が、せいぜい寢床の上だけである。自分も虱に生れたら、さぞ退屈だった事であろう。……

そんな事を漫然と考えてゐる中に、楊の意識は次第に朧^{おぼろ}げになつて来た。勿論夢ではない。そうかと云つてまた、現^{うつ}でもない。ただ、妙に恍惚たる心もちの底へ、沈むともなく沈んで行くのである。それがやがて、はつと眼がさめたような氣に帰つたと思うと、いつか楊の魂はあの虱の体へはいつて、汗臭い寢床の上を、蠕々^{ぜんぜん}然として歩いている。楊は余

りに事が意外なので、思わず茫然と立ちすくんだ。が、彼を驚かしたのは、独りそればかりではない。――

彼の行く手には、一座の高い山があつた。それがまた自らな円みを暖く抱いて、眼のとどかない上の方から、眼の先の寢床の上まで、大きな鍾乳石のように垂れ下つてゐる。その寢床についている部分は、中に火気を蔵しているかと思うほど、うす赤い柘榴の実の形を造っているが、そこを除いては、山一円、どこを見ても白くない所はない。その白さがまた、凝脂のような柔らかみのある、滑な色の白さで、山腹のなだらかなくぼみでさえ、丁度雪にさす月の光のような、かすかに青い影を湛えているだけである。まして光をうけている部分は、融けるような鼈甲色の光沢を帯びて、どこの山脈にも見られない、美しい弓なりの曲線を、遙な天際に描いている。……

楊は驚嘆の眼を見開いて、この美しい山の姿を眺めた。が、その山が彼の細君の乳の一つだと云う事を知った時に、彼の驚きは果してどれくらいだった事であろう。彼は、愛も憎みも、乃至また性欲も忘れて、この象牙の山のような、巨大な乳房を見守った。そうして、驚嘆の余り、寢床の汗臭い匂も忘れたのか、いつまでも凝固まったように動かなかった。――楊は、虱になつて始めて、細君の肉体の美しさを、如実に観ずる事が出来たの

である。

しかし、芸術の士にとって、虱の如く見る可きものは、独り女によたい体の美しさばかりではない。

（大正六年九月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女体

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>